

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1教育課程・学習支援	<p>a 研修の機会を充実させ、教員同士の話し合いや学び合いの促進を図る。</p> <p>b 学校生活における視覚支援用具の効果的な活用を支援する。</p>	<p>・全ての観点において目標指数を上回ることができた。しかし、「あまりできなかった」との回答が1名あり、より話し合いがしやすい環境づくりを目指す必要がある。</p> <p>・全ての観点において目標指数を上回ることができた。ただ、自由記述でルーペや単眼鏡の活用が減ったとあったので、それらの活用の機会を作るような取組が引き続き必要と考えられる。</p>	<p>・今後もお互いに学び合える教師集団であることを目指す。そのために、必要な校内研修を実施するとともに、校外での研修や研究会での情報の共有を随時行うことで、教師の学びの機会を保障し、互いの知見の深化を図る。</p> <p>・視覚支援用具の活用について、生徒の状態を的確に把握し、必要なスキルを身に付けられるよう教師の研修の機会を設定し、それを生徒に還元できるように努める。</p>
2生徒支援	<p>a 安全・安心に関する訓練を行い、教職員の防犯、防災意識を高め、非常事態に対する能力向上を図る。</p> <p>b 児童生徒の協働的な活動や行事への積極的な参加を促し、豊かな人間関係を育む。</p>	<p>・教職員に対する具体的取組については、目標を達成した。非常食の準備・片付け・試食、防災グッズの使用の確認、消防署員に指導を受ながら防火扉やシャッターの位置確認や通行体験を行った。事後アンケートでは、避難訓練や訓練後の様々な体験が、防災意識を高めることにつながったという意見が多くあった。福祉避難所は11月に福井市と協定を締結した。</p> <p>・2人の生徒があまりできなかったと回答している。学習内容が複雑になったこと、スケジュールに見通しをもてなかったこと、文化祭において集団で取り組む演目が少なくなったことなどが一因でないかと考える。来年度の学校行事の内容や準備期間、幼児児童生徒の参加や役割、教師の支援方法について検討していく。</p>	<p>・災害種別に応じた訓練を積み重ね、危機管理マニュアルの改善を図り、自ら安全を守る意識と行動力(白杖や手引きを用いた安全な移動等)を高めていく。また、福祉避難所の具体的な運営、個別避難計画の作成等について継続して県や市と連携し取り組んでいく。</p> <p>・生徒一人一人の特性や得意分野を考慮し、全員が「参加している、必要とされている」と実感できる具体的な役割(係や分担)を設定する。行事の準備段階から、生徒が主体的に関わり、生徒同士の対話や協力が必要な場面を設定する。教員は「調整役」として円滑なコミュニケーションを支援する。行事直前に準備を詰め込むのではなく、生徒が日常の中で少しずつ進められるような内容や計画になるように支援する。</p>
3進路支援	<p>a 関係機関と連携を図り、収集した情報を教員間で共有し、進路支援に積極的に活用する。</p> <p>b 個のニーズに応じた情報提供や進路行事を実施し、生徒の主体的な進路選択につなげる。</p>	<p>・全ての観点で目標指数を上回った。生徒及び保護者が希望する進路に応じた情報提供や進路行事、交流活動等を計画的に行ったことにより、生徒が主体的に進路を決定したり、選択したりすることができた。1名の保護者から受験に関する情報提供について要望があった。</p> <p>・Teamsを活用することで、個々の支援に関する情報共有や意見の集約を速やかに行うことができた。</p>	<p>・次年度の中普部の在籍生徒は、高校入試を控える生徒1名と外部から中学部1名と普通科の進学生2名を加えた4名となる予定である。本人及び保護者の願いや要望等を丁寧に聞き取りながら、本校の学部学科を含め関係機関とも連携して進路支援に努めていく。また、自立した生活を送るための支援も継続していく。</p>
4啓発活動	<p>a 盲学校及び理療科啓発について、学校全体で取り組む。</p> <p>b 盲学校及び理療科について、セミナーや関係機関訪問等の機会を活用し周知する。</p>	<p>・啓発活動は、県内の高校進路指導窓口、市町の福祉課、社会福祉協議会、ハローワーク等を訪問し、盲学校及び理療科の啓発を行うことができた。</p> <p>・高校へは福井市内を中心に6校(私学を含む)を訪問した。理療科の進路のひとつであるヘルスキーパーを中心に情報提供を行い、今後の進路として認識してもらうことができた。</p> <p>・出前授業や教員を対象とした研修会での情報提供等、盲学校を啓発する機会を多くもつことができた。</p> <p>・アンケートの全ての項目で目標を達成することができた。</p> <p>・結果として、入学者につなげることはできなかったが、今後も引き続き取り組んでいく。</p>	<p>・高校訪問については数年間を見通した計画的な訪問が行えるよう実施体制について再検討する。</p> <p>・できるだけ早い時期から実施し、訪問後のアンケート結果を活動にフィードバックしていけるよう取り組む。</p> <p>・引き続き、見えにくさを有する生徒や県民への啓発を羽二重ねっと(福井県視覚障がい者支援ネットワーク)と連携し協力を得ながら実施していくことで、入学者確保につなげていく。</p>

5 視覚障がい相談支援	<p>a 子どもの視機能や発達の様子、ニーズを把握し、担当者間で共有しながら巡回相談や来校相談などを実施する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全ての観点で目標指数を上回った。中高からは視覚障がいのある生徒の進学就労先について聞きたいとの要望が多い。卒後を見据え早期から情報を伝えていく必要を改めて感じた。 ・特別支援学校の見え方相談では7校21名の相談を行った。 ・部会の中で相談児生の報告を行ってきたが、課題や対応等について意見を出し合い、より深く話し合えるとよい。 また、教育相談における本校資源の活用についても考えていく。 ・今年度は嶺南4市町教育委員会への啓発活動を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高校卒業後の進路に関しては、本校の関係教員から情報を確認し、盲学校や教育相談を行った生徒の具体的進学就労状況をまとめておく。 ・特別支援学校への教育相談に関しては必要に応じて回数や時間を増やす、記録を活用するなどしながら要望に応じていく。 ・適宜部会の協議の中で話し合う機会を作る。来校相談やスクール、盲学校行事等を捉え、相談児生と本校職員や在校生がかかわる機会を作り、互いを知ったり情報やスキルを伝えたりする。 ・今後も啓発活動を定期的に行い教育相談を知っていただく。
6 寄宿舍生活	<p>a 個々の課題に対し、視覚障がいに応じた生活の知識や技能を身に付けられるよう支援する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全ての観点で目標を達成することができた。個々の見え方や生活経験、進路先に応じて支援を行った結果、調理や掃除等の生活活動に前向きに取り組む舎生の姿が見られるようになった。また、家庭での実践も増えており、寄宿舍での支援が日常生活に生かされていることが確認できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も舎生一人一人の課題を的確に把握し、卒業後の生活を見据えた段階的な目標設定に努める。 ・寄宿舍での生活場面を生かし、日常生活につながる支援をさらに充実させる。 ・寄宿舍での様子や支援内容を学校・家庭へ継続的に発信し、連携を深め共通理解のもと支援を行う。
7 人権教育	<p>幼児生徒の人権感覚を育むとともに、他者とのかわりの中で人権意識の向上を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教員を対象としたYouTube視聴による人権研修を開催し、様々な人権問題について学習した。 ・幼児児童生徒と教職員が、学校行事や特別活動の場を通して、自己や他者を尊重とする人権感覚を育むことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も職員研修等を通して、人権意識の啓発と教育活動における人権擁護の実践に取り組んでいく。 ・幼児児童生徒が自己肯定感を高め、互いを尊重し合いながら成長できるよう、学校行事や特別活動を中心に学校生活の中で支援していく。
8 業務改善	<p>行事や会議等の実施方法を工夫するとともに、ICTを活用した情報の共有を通して、校務の効率化・スリム化に取り組み、働きやすさと働きがいの両立を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・個人面談を通じて「やりたいこと・なくしたいこと」を可視化し、全体共有を実施したことで、校務改善に対する教員の当事者意識が高まり、業務の見直しや提案が自発的に出るようになった。 ・生成AI(NotebookLMやCopilot)を実務に投入し、議事録作成や資料作成などの事務作業を大幅に効率化した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校務改善の取組を一過性に終わらせず、定期的に点検・改善する仕組みを整える。 ・ICTやAIで事務的業務を刷新し、盲学校の専門性の継承や教材研究及び教育相談などを深化させる時間を創出する。 ・教員間の対話と協働を促す場を意図的に設け、相互理解を深めることで、安心して挑戦できる働きやすさと働きがいを高めていく。